

Craig Jeffrey, Timepass -- youth, class, and the politics of waiting in India

著者	佐々木 宏
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	54
号	1
ページ	125-128
発行年	2013-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00040586

Craig Jeffrey,

*Timepass: Youth, Class,
and the Politics of Waiting
in India.*

Stanford: Stanford University Press, 2010,
viii+221pp.

さ さ き ひろし
佐々木 宏

はじめに

評者がしばしば調査のため訪問する北インドの街角では、路上でたむろする若い男性たちの姿をよくみかける。昼間から、チャイ（お茶）露店でふざけあったり、時にデモやストライキの輪のなかで声を張り上げたりしている若者たちだ。多くは大学院や大学の卒業生、また現役の学生である。こうした風景をみると、インドでは希少性が高いはずの高学歴者がなぜ就職できないのか、望む仕事に就けなくとも他に仕事があるのではないかと疑問をもつ人もいるかもしれない。学生に関しては、なぜ暇を持て余しているのかといった疑問もわいてくるだろう。

しかし、インド、とりわけ北インドの事情を知る者にとっては、この風景はさほど意外なことではなかろう。インドの高学歴失業者の問題は、古くは1970年代のロナルド・ドーアによる学歴社会論 [Dore 1976] ^(注1) において学校教育の普及と近代労働市場の発展のミスマッチを背景にして発展途上諸国で構造的に発生する問題の典型例として紹介されているし、インドの失業研究でも繰り返し指摘されてきた。そして、高学歴者が肉体労働を忌避する傾向は、インドにおける知的労働偏重の規範に関連していると一般に説明されている。また、インド工科大学ほかの一部名門校を除くとインドの高等教育は脆弱で、そもそも教育機関として成立しているのかどうか疑問をもたざるを得ない学校も少なからずある。

このような条件のもと存在していた「アンニュ

イな高学歴者」が、今、目立つようになっている。その理由は近年の中高等教育の急速な普及にある。1990年代半ばから現在までに農村部の中等教育対象年齢層の就学率は20ポイント以上増加し、高等教育対象年齢層の就学率は（いまだ10パーセント程度とはいえ）都市部・農村部いずれでも倍増している。一方でこの間の経済成長は「雇用なき成長」と呼ばれ、学卒者向けの雇用はさほど拡大していない。最近の統計を眺める限り、冒頭で述べたような若者たちが目につくようになったのも頷ける。

本書はこのような若者たちを対象にした調査研究である。フィールドはウツタル・プラデーシュ (UP) 州北西部、デリー北西約80キロメートルに位置する都市メーラト (Meerut) である。タイトルの Timepass は無為に時間を過ごす若者たちが自分たちのありようを形容する際に使う言葉である。いうまでもなく有為な若者たちにとって「無為に時間を過ごすことを強いられた状態」（以下、タイトルにならない Timepass という）は苦痛であろう。社会にとってもそのような若者たちが増加することは好ましくない。事実、インドでは、持続的経済発展や治安などの観点から彼らは問題視されはじめている。

本書は今まさに適切な対応が求められているインドの課題をとりあげているという点で、タイムリーな一冊だと思う。これが本書の大きな意義であるが、他にも多くの魅力がある。現代インドに興味がある者にとっての研究上の刺激と言いつてもよい。以下、章立てにそって内容を簡単に紹介し、その魅力について述べてみたい。

I 本書の構成と内容

第1章では著者 Craig Jeffrey の関心と本書の目的や方法が整理されている。著者のおもな関心はカーストと社会階級の再生産をめぐるマイクロポリティクスにあり、研究方法は質的調査を採用している。

本書では、UP 農村の Jat という農民カーストの人々（多くは自ら耕作にかかわらない豊かな「地主」で、地域のカースト序列においては中位にある）を対象にしたインタビューと参与観察の結果を使い、農村の Lower Middle Class の社会経済的地位の維持・向上戦略の分析をすすめているのだが、本書の特徴は Jat の人々のなかでも高等教育に進学

した若者たち、とりわけ学生運動に参加する若者たちに焦点をあてていることであろう。1990年代頃から Jat の人々は子どもへの教育投資をすすめ、その結果、高学歴は得たが就職できず時間を持て余す若者たちが生み出された。そして彼らの一部は積極的に学生運動にコミットしている。このような意図せざる帰結をもたらした、農村の Lower Middle Class の行動を階級やカーストの再生産をめぐるポリティクスの文脈で解釈することが、本書で著者が一貫して取り組んでいる作業である。なお、本書はピエール・ブルデューの再生産理論 [Bourdieu 1984] をベースとしており、まずは社会学（文化人類学）的な研究として理解することができるが、ポストコロニアル社会が舞台となっていることもあって、民衆による「（広義の）政治」の評価をめぐる議論も同時に追求されている。このようないわば政治学的な議論に関わって著者が設定している課題が Timepass のインド政治への可能性の検討である。

第2章では「アンニュイな高学歴者」が生まれた経緯が述べてある。独立以前から農地所有において有利な立場にあった Jat は緑の革命の恩恵を受け「地主」に成長した。彼らは独立インドの農業発展と農業保護策に乗る形で栄えてきたわけである。同時に Jat は政治運動とコラプション（Corruption）を含む非正規なアクションを通じてローカルな政治や行政と結びつき、農政から利益を引き出してきた。しかし1990年代に変化が起こる。まずは経済自由化のなかで農業に対する政府の手厚い補助や保護が期待できなくなったことである。次いで、政府の下位カースト優遇策（留保政策）により力をつけた下位カーストの一部に Jat の地位が脅かされるようになっていく。Jat はこの局面に2つの戦略で対応している。ひとつはローカルな政治・行政との関係を一層深めること、もうひとつは農業外雇用を得ることをねらった子どもへの教育投資である。後者が Jat の若者たちの高学歴化をすすめることとなった。

第3章から第5章はメーラトで2004年から05年にかけて実施された大学院生と大学生を対象にした質的調査の分析である。分析においては、とりわけ学生運動家（学生ユニオンのリーダーなど）に焦点が当てられている。

第3章では、まず Timepass のアンニュイな側面が描かれている。古臭いキャンパスでやる気のない

教員たちの「時代遅れの知識」の詰め込み式の講義を聞き、進級や卒業試験の前に一夜漬けの勉強に終始する日常、そして何某かの学位をとっても就職のあてがないため、さらなる学位を得るため学生であり続ける若者たちの姿である。一方で、章の後半では Timepass が文化の苗床としての役割をもっていることが指摘されている。ストリートの若者たちのコミュニケーションから固有の文化が生み出されているのである。この文化の特徴のひとつは「男性性」(Masculinity) の強調である。また、カーストや宗教を超え、Lower Middle Class の若者文化として共有されていることも特徴だという。

第4章では、学生運動のリーダーをとりあげ Timepass は文化のみならず社会変革への連帯行動を醸成する基盤になっていることを指摘している。学生運動家たちは、授業料値上げ、学内でのコラプション、大学当局や警察による学生へのハラスメントなどに対する異議申し立てを、カーストや宗教をまたいで組織し、ある程度の成功を取めているという。こうした行動は第3章でみた若者文化に彩られ、一見、無意味かのようにみえる彼らの学生生活のやりがいや自己肯定感の源泉となっている。

第5章は学生運動の負の側面に焦点が当てられる。正確には負の側面というよりもカースト序列を克服しているようにみえる若者文化や連帯が、カースト序列の再生産のメカニズムのなかに組み込まれているという点で、矛盾と言った方がよいのかもしれない。実は Jat 出身の学生運動のリーダーたちの多くは、運動のなかで大学当局や警察との関係を深め、下位カーストを排除し便益を独占しているという。

著者はコラプションにより10万ルピー単位の金銭を得ている学生運動家の事例を紹介している。このことはメーラトでは公然の秘密で、時に批判を受けたり、運動家自身も「運動の方便」と消極的に捉えたりもしている。しかし、大勢として若者たちは自らの不正行為を強くジェンダー化されたある言説に依拠して「知恵や機転により、巧みに事をすすめる男らしい行為 (Jugar)」と表現し、肯定的に理解している。『ヒンディー語=日本語辞典』(大修館書店、2005年)があげる Jugar (जुगार) 第1の意味は「工面、やりくり手配、準備、段取り」である。そして、Jugar 礼賛は、若者たちのオリジナルではな

く、彼らの父親たちがローカルな政治・行政との関係構築の場面において不正を正当化する際の言説に由来している。

本書のまとめにあたる第6章では、まず、カーストと階級の再生産に関わる結論として、メーラトとその近郊の階級のポリティクスにおいてローカルな資源や関係性が如何に大きな意味をもっているかを指摘する。また再生産のポリティクスに関わる結論としては、分析枠組みとして採用したブルデュー理論の有効性も提起されている。さらに、Timepass から生まれる新しい文化や連帯の創造的な側面が指摘されている。この3点目はポストコロナル社会におけるデモクラシーの評価に関わる結論といってもよいだろう。

II 若干のコメント

以上が本書の内容であるが、率直に評すると上記の結論はそれほど画期的だとは思わない。インドの階級の再生産において近代的市民社会の外にあるものが大きな意味をもつこと、Timepass が文化や連帯の基盤であることは、先行研究やフィールドでの直感から容易に想像できるからである。また、著者自身、2008年に出版した別の著作（共著）[Jeffrey, Jeffery and Jeffery 2008] のなかで、他地域での調査結果を使って本書と重なる課題に取り組んでいる。しかし、オーソドックスな仮説だとしても、それを繰り返し検証できるか否かは研究者の手腕次第であろう。本書はこの点で成功しており手堅い研究といえる。

ただ、それ以上に本書を魅力的にしているのは、カーストや階級、インド政治研究の枠に取まらない知見が多く含まれていることではないかと思う。実は著者も本書の最後にこれらの「副産物」を列挙している。このことは質的調査をベースにしている本書の大きなメリットであろう。質的調査は、仮説検証の手段にもなりうるが、一方で仮説生成や課題発見を得意とする方法だからである。ここでは著者があげた「副産物」以外で印象的だったものをいくつかあげておきたい。

まずは、インドの地方の高等教育の現実である。主として第3章で、メーラトの高等教育機関の姿が赤裸々に描かれている。施設上の不備や研究機関と

しての質の低さのみならず、教員の授業放棄、教職員による日常的な取賄等々といった問題が山積している現実である。これらのことは、インド研究において「大学」あるいは「大学修了の学歴」といった事実を取り扱う場合、その中身を吟味して解釈する必要があることを示唆している。

次に、第4章から第5章にかけて叙述されている学生運動の姿も印象的であった。日本の1960年代に盛り上がった全共闘運動などを念頭におくと、若者が「天下国家」に関わる理想を掲げ体制に反抗し、既存の政治勢力がそれを取り込もうとしたり、時に若者がそうした大人に反発をしたり、といった学生運動の姿が想起される。しかし、メーラトの学生たちの運動はそれとは趣が異なる。著者によれば、彼らの運動はあくまでも学内の論点に終始し、学外への広がりはず、政治団体や政党との関係はそれほど強くないという。このような特徴をもつメーラトの学生運動は、社会運動の国際比較やインドの社会運動研究の文脈で、どのように解釈できるのだろうか。

また、先進諸国の学生運動は若者研究において、運動が生じた当時の社会経済のうねりに関わらせて、「若者」「若者問題」といったカテゴリーの変容の節目を象徴する現象として分析されてきた。本書にある若者たちの姿が、インドの若者のある部分の典型を捉えているといえるのならば（著者はそのような普遍的な位置付けをさしあたり与えていない）、それは現代インド若者研究の格好の素材となるだろう。

第3は、本書全体を通じて浮き彫りになっているメーラトの人々の生活の基底にある「家族依存」の構造である。ここでいう「家族」は、G. エスピン-アンデルセンらによる福祉国家レジーム論 [Esping-Andersen 1990] において「国家」「市場」に對置されているもののことである。著者が繰り返し指摘するコラプションの横行は「国家」の「家族」への従属を示している。同時に指摘されている教育の市場化の急速な進展からは、人々の生活はいわゆる「前近代社会」のように「家族」にのみ埋め込まれているとはいえない。そして、メーラトにおける教育の市場化は教育行政の制御の及ばないところで進んでいる。ならば、メーラトの人々の生活は、資源や権力の源ではあるが自律的に機能しないとい

う点で弱い「国家」に対し、「家族」「市場」が突出した構造の上にあると考えることができるのではないか。福祉国家レジーム論では、こうした構造はそれ特有の不平等を形作るとされている。本書が描く人々の生活の姿からは、北インドの地方都市やその近郊農村の不平等の土台がうかがえ興味深い。

以上は、評者が発見した「副産物」の一部である。評者とは異なる視点や関心から読めば、他にも多くの研究上の示唆やヒントが得られるのではないだろうか。たとえカースト、階級、インドの政治等に関心はなくとも、インドの今に関心のある方にはぜひ手に取って見ていただきたい一冊である。

(注1) 本書の Bibliography では当該文献の著者名が“Dore, Robert”と表記されているが(p.198), “Robert”は“Ronald”の誤記であると思われる。

文献リスト

- Bourdieu, Pierre 1984. *Distinction: A Social Critique of the Judgement of Taste*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Dore, Ronald 1976. *The Diploma Disease: Education, Qualification and Development*. Berkeley: University of California Press.
- Esping-Andersen, Gosta 1990. *The Three Worlds Welfare Capitalism*. Cambridge: Polity Press.
- Jeffrey, Craig, Patricia Jeffery, and Roger Jeffery 2008. *Degrees without Freedom?: Education, Masculinities, and Unemployment in North India*. Stanford: Stanford University Press.

(広島大学大学院総合科学研究科准教授)